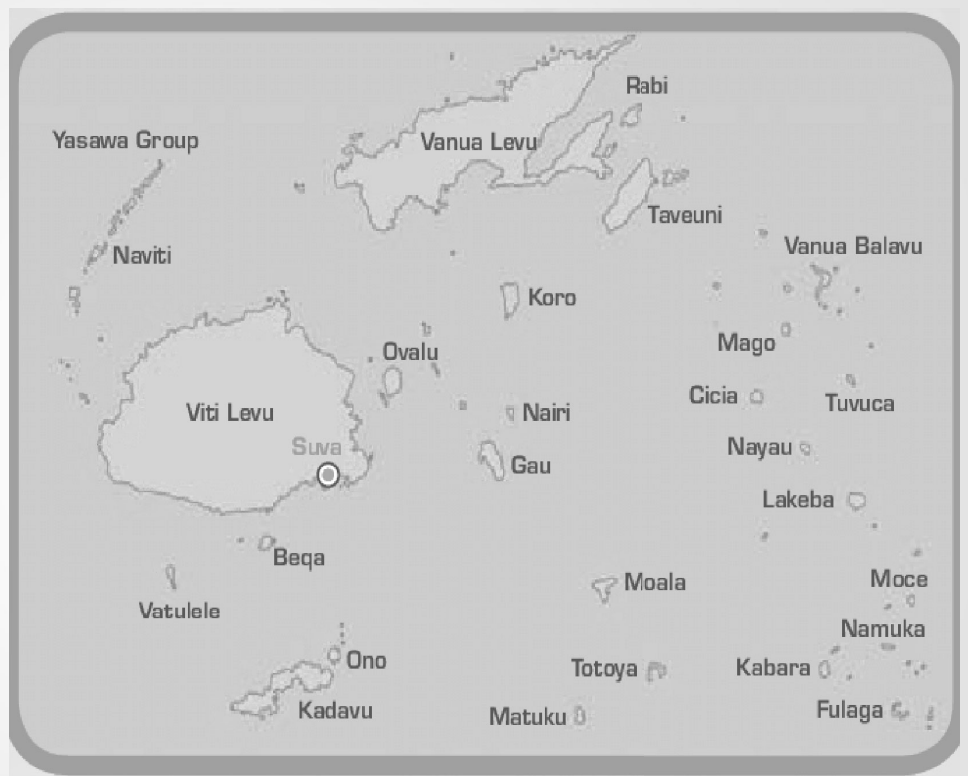


日本オセアニア学会第40回研究大会 2023/3/15

オセアニア植民地時代における 非白人移住者（3） ーフィジーのインド人年季契約労働者ー

山本真鳥（法政大学）

フィジー諸島
地図



フィジー諸島年譜 1

- ▶ 1643年 アベル・タスマン、ヴァヌア・レヴと北タヴェウニ諸島を目視。
- ▶ 1789年 ブライ船長がヴィチ・レヴ島とヴァヌア・レヴ島間を航海、地図化。
- ▶ 19世紀初頭 白檀・なまこ採集業者、捕鯨船等コンタクトあり、ビーチコマー。
- ▶ 1820年代 ヨーロッパ人の町レヴカ誕生（交易人などの入植）、交易などのコンタクトを通じて、マスケット銃が出回る。首長間の競争激化。
- ▶ 1830年代、タヒチ、トンガなどから宣教師来島、改宗は当初あまり成功しない。
- ▶ 1840年代、トンガからMa'ahuがキリスト教と一体化して平定を進める。
- ▶ 1854年 Cakobau改宗。その後、アメリカに借金。
- ▶ 1858年 イギリスに併合を申し出（4年後受け入れ、イギリスは併合も植民地とはせず）
- ▶ 1860年代、綿花栽培さかんとなり、プランテーションできる。プランターが政府を提案してCakobauを盟主に。1871年、フィジー王国。

フィジー諸島年譜 2

- ▶ 1860年代～ 内陸部のフィジー人（キリスト教化していない人々）との断続的戦い。Gordon来島まで。捕虜を奴隷に、5年間の奴隷。
- ▶ 1874年 英国、フィジー植民地化。
- ▶ Anglo-American, Anglo-Australian planters 何千人も
- ▶ 1865～1874 Blackbirdingでメラネシア人労働者（免許制度） フィジー人（自由）は高い
- ▶ 1874年 英国が植民地化。植民地政府樹立
- ▶ 1875年 はしかの流行、40,000人死
- ▶ 1875年 Sir Arthur Hamilton Gordon総督、インドからの年季契約労働者導入を提案（英国の他の植民地での経験から）
- ▶ 1915年 インドでの年季契約労働制度の廃止運動
- ▶ 1916年 年季契約労働制度終了

フィジーのプランテーション開発

- 最初は、南北戦争で綿花需要あり、それに答える綿花プランテーション開発
- 綿花はあまり成功せず、そのあとサトウキビに転換。
- オーストラリア・クイーンズランドがモデル。
- 最初はメラネシア人（ニュー・ヘブリデス、ソロモン等）、帰りにお土産、のみ。やがて国際的批判を浴びるようになる。
- 奴隷（戦争で捕虜になったフィジー人）60年代。
- フィジー人の利益を守る。土地は伝統的な集団世帯所有。Fijian way of lifeを守る、というのがイギリス本国のたてまえ。
- 伝統的土地（マタンガリ所有）が多い、一部売買自由な土地。プランテーションの多くはリース。現在、国有地（state land）9.45%、自由所有地（freehold land）8.17%、原住民地（native land, サモアの慣習地に相当）が82.38%となっている。ただし、サモアと違って、原住民地はリースに出されている土地が多い。
- 1875年のはしかの流行で、フィジー人の大量の死者が出る。
- Sir Arthur Gordonは外務省の能吏、1875年よりフィジー総督。トリニダード、モーリシャス、英領ガイアナなどの経験から、インド人の年季契約労働者導入を主張。

インド人年季契約労働者の徴集

- 海外経験なし、海を見たこともない、フィジーがどこにあるか知らない、という人たちをカルカッタ、マドラス等、インドでリクルート。リクルーターは甘言で誘う（だますこともあり）
- インドは人口過剰でプッシュ要因あり。
- 1879年～1916年に60,537名導入、男性100名に対し、女性40名（このうち、カルカッタ出身者が45,863名）、女性は夫のいる人
- ブラーマンからuntouchablesまで、いろいろな階層を含む。カースト制の弛緩した都市住民。
- 最初5年契約。任期終了後、自前で帰国、残留して自営または再契約、再契約であれば5年後に旅費は政府もちで帰国できる。10年経ったら帰国という具合で、残留はしないはずだったが、帰国事業はあまり積極的でなかった。
- 再契約する人は多くない。政府は土地5エーカー以内を貸し出す。そこで自営農のようなことをする人も。
- インド人自身がプランターになることは難しいが、そうした人も出る。

プランテーションの暮らし

- 労働条件は厳しい。仕事の割り当て。こなせるまで働くので長時間労働。
- 基本的にはプランテーション労働だが、家内労働などもある。監督になる者も。
- 食事はまずい、食料は十分でない。ウジのわいた米なども。非衛生的な住環境（インドより少しまし）、狭い、プライバシーなし。死亡率高い。
- プランテーションに病院があることになっているが、実際には医務室程度。後には、町に病院があつて、労働者自身が通う。
- 長時間労働、現場監督はむちや棒を持つ。労働できない、労働しない、には体罰や刑罰で（契約違反とする）
- 現場監督との間で始終いざこざ。刑事事件も発生。
- 政府は監視官を派遣するが、これはプランター側なので、労働者の味方はいない。暴力、レイプなども訴えは難しい。法廷で勝っても報復がある。
- 女性が少ないので、取り合いとなる。インド人男性の間にも争いの要因が。殺人、レイプ、自殺等々。

インド人年季契約労働者の文化

- カースト制は弱まる。
- プランテーションでの地位（現場監督など）によって、カーストに添わない社会階層形成も。
- やってきた船に乗船していた仲間意識高い。
- 祭りや人生儀礼など守る。
- 出身地による文化的・言語的相違。互いに言葉はわからない。フィジー的なヒンドスタニ語が共通語となる。

年季契約制度（girmit）外の経済活動

- 1916年に年季契約労働者の導入は終了。
- 1915年にはインドにて廃止運動。
- 1878年から1916年の間に、最初はカルカッタから、その後ムンバイやマドラスから、総計60,965人が出国。しかし到着したのは、60,553人。
- 年季契約あけに商売する人、土地を借りて農民になる人も。
- 自営農をする人に土地（5エーカー未満）を貸し出す制度も。
- 自由移民（自分で運賃を払う）で来る人も。商売をしたり、事業をする。
- 1888年頃から増加の一途。1918年には、2000件を越す事業者。
- 1898年には、サトウキビの供給量は、インド人の生産の方がヨーロッパ人のそれより多くなる。
- その他の農業、畜産なども増加していく。インド人は土地所有よりリースを好む。
- ストライキ（1920年, 1921年）など

クーデタとインド系住民

- 1956年から1980年代末まで、インド系が人口のマジョリティだが、選挙制度により議会ではフィジー系の保守勢力が実権。
- 1987年 Timoci, Bavadra首相に、Sitiveni Rabukaの第1回クーデタ（5月）、第2回クーデタ（9月）フィジーを共和国に、憲法改正
- 2000年 インド系初の首相Chaudhry、George Speightのクーデタ
- 2006年 Bainimaramaのクーデタ
- クーデタの度に、インド系住民は国外へ、エリートほど
- 現在、インド系住民313,798 (37.6%) (2007 census) out of a total of 827,900 people living in Fiji as of 2007.

むすび—サモアとの比較

- ▶ インド系学者の研究が多い。
 - ▶ フィジーに導入された年季契約労働者人口は10倍。
 - ▶ 年季契約終了後、自由移民として経済活動参加が可能。サモアの場合、年季契約労働者は、土地所有、リース、事業主になること、サモア女性との結婚が禁じられていた。帰国者が多い（希望でそうなったというよりは施政者の方針）。
 - ▶ インド人女性との結婚から、家族をもつことが可能。混血も可。インド人コミュニティが生成。サモアでは、禁圧されながらサモア人女性との間に闇の家族をもつことのみ可能。子どもたちはサモア人として社会内に吸収。中国人コミュニティは、21世紀になるまで、ほとんどできなかった。
 - ▶ 自由移民の来島もあり、インド人による経済活動が活発。商店、会社経営など、ビジネス界への進出が著しい。政界進出も。サモアでは、中国系の旧移民の活動はあるが、フィジーのインド系とは比較にならない。
-
- ▶ 資料が間に合わず申し訳ありません。以下のサイトからダウンロードできるようにします。
 - ▶ <http://www.matoriy.com>